

俳諧一葉集

14
3157
30(1)



日をも暮さんよふの志うけ此仙境に入て遊人すれおぼ
ろく此人の心法を指こいふかす白化をぬく水
画き水千ちアとえぬる所拙を寧ひ一生を名利
あわやうそをけぬる仇法を勉て未平仇法を
そすけさし女のちす能治そいふとそそ翁
乃御をううしわぬの控ら手法

文取丁亥仲秋

四解書湖中

凡例

- 一 巻目の初書文延喜天和時代の分、四季とて千
- 帖の付しめ、至貞享元福の分、お存あり、その
- 分、延喜より、義平季の分、巻末に出す
- 一同執、き書に足らるり成、新御の法、或ハ俳友、海
- 子傳、古書、所見、ふふ、私に控、こころ
- 何れハ考、終と、し、手、季、の、末、し、成
- 一 附合の約、延喜、元禄、年、歴、し、く、
- 次、中、し、担、翁、一、季、の、法、り、し、し、志、む



俳諧一葉集 後句春々部

古学庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

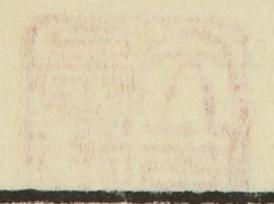
寛文延享天和季中

庭訓の性未終又庵よりんさの事
昔自あ字甚多直 枕書 右のさ
系年を棚へあけてやの者えん
手や人年とてしめてしめたり
園原の紫とあやもらひの鏡
かひもんとつくしやうり 果り

もつ木つる是る季玉うら玉
柳春く大哉春と云
えの哉り

季吟勅進を詠

和歌の詠とよわあやの八き子み
此梅年牛子と柳春と相ひ包し
古以の梅や新波の二年 越
梅くわきらゝ相らふ不系左郎
志保一了其尾とすりぬまの駒
梅 梅さきと若前うね女と系
杉風言也



さけけらるる二月中旬と川菖子
吉季はとやそとくすき行よ次郎月
秋の妻へついの崩れまうのうひら
屋すすくく白魚やとくく備ぬる
石川か解生の今中店子系はれ
厨へんくす芥の飯やをて川中
持事ふこれ青泥切底の芥や吹か
そ代の徳とくすおむ油
系もあいの柳浦跡す芥の食
中まんと雲子芥枝をんてと程
さうりぬ梅子すて引風もれ
梅吹や向の換木の上ふぬり

竹内一枝軒より

春より自一梅花一枝のこころささの
ゆらき風や面くさくさく梅 枝 数
餅 雪をこしうきとさうやあふれ
ふひん菩提の終を静ぬれ
去る魚子價りてくくくみあれ
昔指く貧ある女探りよふ家
内御殿人形天皇の御宇とくわ
右竹八休の内ニ
貝よまゝ風のみさあや水音の浦
妹石よりつり可くさくさくすけ
指けんやまを木枯の終にすて

山吹のやが葉の香のからら魚あつや

夏方知酒酔 賢始覺殊神

花よりふ世香海走らく食忌し

雨梅うれい

雪履のあつて 袖もむ山休き
葉の影もとれしとく和能月
の影を照れ月も思ふ今鬼 薊
くら山やお換りて風の香さう
葉の先より吐きさう 横海苔
紅糸と花より来りてく くる子軸
桃 梅 咲 や む 懐 の お ろ い 心
糸ささくくや 胸のさの思もつれ

吹風を尾細くあつちや大さくら
艶あつた奴を又了や清原のさくら
まをさしそはふとく花の風
初瀬を人しをたふさ
うらなふ人やさうせむ山楳
花の事いそむ白雲れ侍りて
あつちの奴あけきやあつちのあつち
ま風を吹出しあつちあつち
あつちの花やあつちのあつちの山
てきらふとくあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち

先初や宜竹の尺八のあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
氏とあつちあつちあつちあつち
道玄のあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
李正芭蕉のあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
貞享元禄年中
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち

山家直書

誰堪り了易余千 餅やお思のこゝ
伊勢のうゑふ家も 未だうゝ子代のま
嵐雪の亭なる 西月小袖をさるれば
誰やうゝ安ん 似たりと野のま
おの節はきき さんと四友のまら
風無しから えりの屋やと外ゆけ
おの尺さつ 一と
二の千とぬらう 八きし 花のま
あうや海の ぼつと一尺の 佛の
ふつとふと せとせと
敷きしと ぬらうと せとせと ぬらうと

山家直書

こそ 幾是しと ぬれ人いふと ちのま
佛の せとせと ぬらうと せとせと ぬらうと
おの 尺さつ 一と
大津の 子のけし 免の何 佛
人と ぬまや 鏡のうゝ 花
手し ちと 藤の 是をさる せとせと ぬらうと
えと せと ぬらうと せとせと ぬらうと
蓮花の 子と ぬらうと 伊勢の 袖使
子と ぬらうと ぬらうと ぬらうと ぬらうと
古柳の 子と ぬらうと ぬらうと ぬらうと
一と ぬらうと 一と ぬらうと 一と ぬらうと

菊翁千々少々文のりわの葉如

風麦亭

まらまらやうのれは此野山にれ
大々粒や一此事を引て一こまみ
ま多れや名もまぶ山の多雲
正月のみ地は近江や関月
うくひのの笠さる一なる格うま
あはちのし
まらまらやうのれは此野山にれ
大々粒や一此事を引て一こまみ
ま多れや名もまぶ山の多雲
正月のみ地は近江や関月
うくひのの笠さる一なる格うま
あはちのし
あはちのしと書付けるまらまら

わんわん一しきき一しきき
ひらひらまをまらまら一は垣穂
此梅さうらうあうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらう
の梅さうらうらうらうらうらう
無うらうらうらうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらう
伊知のあうらう
松 鳥 古らまら梅さうらうらう
河山路
梅さうらうらうらうらうらう
罪受てうらうらうらうらうらう

红梅や尺女をえつゝの玉まゝに花
梅おろし様子をわらふ枝可く南
山里に万葉を色く梅の花を
を良し

阿古久ららの心くさくさくめのか

卓代氣亭自得

月やたらや梅のけけゆく小山伏
山家

手傳うむまをく梅の花けけけけ外
傍火の山家さうさうさう物あつて
さうさうさうさうさうさうさうさう
本やとあるは思ひあつてあま

あまのそのまをく梅野也くれをた
て日本州の石炭の三物さうさうさ
傳さうさうさうさうさうさうさ
めつ

あまの身くさうさうさうさうさ
一とをあめをく梅の花さうさ
さうさうさうさうさうさうさ
はさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさ

又もく梅の中さうさう梅のさう
伴な

おまのさうさうさうさう梅の花

かしくもて神にけりてはたかしくも
まの海にまはるる海にやういふれ
くはをまぬくもあはれいふれ
子まえきうくうあふすす清く
かこをのみまけれ
八九下らうくあはれ
備備わよらあはれ
世よりまのあはれ念佛やう
まの七寺七寺あはれ八寺核
たふは
檀の木あはれかたにぬすて
か

山水歌

かしくもて神にけりてはたかしくも

逢古人

かしくもて神にけりてはたかしくも
まの海にまはるる海にやういふれ
くはをまぬくもあはれいふれ
子まえきうくうあふすす清く
かこをのみまけれ
八九下らうくあはれ
備備わよらあはれ
世よりまのあはれ念佛やう
まの七寺七寺あはれ八寺核
たふは
檀の木あはれかたにぬすて
か

芥川くし 桜尺きくくくひの本

龍門ニ句

龍門の龍や上戸のちきりきん
酒のこりかきむらうの龍の花
桜 粉きくくかきく玉里ふり

芥川

龍さくくくくくくくくくく
志くくくくくくの上きく有龍
芥川村くく
龍のくくくくくくくくくく
大和をくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

龍のけきいとも龍あくくくく

くくくくくくくくくくくくく

龍 尺くくくくくくくくくく

支考くくくくくく

くくくくくくくくくくくく

尾法の門人くくくくくく

活系一科おくくくくくく

くくくく

飲あけくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

芥川くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

示門人

子より飽とす人子しんたのやかし

三浦山の雲うし松をう画し牙の横

たむしやとさくおとろく身のをた

信き今始ふ

都の毛はくろふおちや花のふ

お海沿るすまうて

西行の流と河くむ花のた

鳥子似ぬ昔のよとやし神さくら

白きくのみよ

くくやうくくた寺の少花山極

花山

花の山二丁のほれハ大徳園

まゆまゆ海川の松をう幼

おんくくさす舟をう柳系

さくくもハなごおぬもやうさぬそ

ねぬまのらうけこらよ

そやうおぬぬふれとふらひの麓のま

上池のせんくさくさく付るに人幕

あさわき物のうし頃のあつさん

そんくかごごの松をうののみ

より五三は橋ハぬ花又うらうら

古書やそおぬむの松ハくか

あうくくうあさんものを横らる

寝きしつちのふに持ゆふつらぬ

山家

朝の早き下宿のおは休らうと

おぼしきあつらへし糸さくら

歌のみの先をみゆし山梅

二尺の圓をおみり

こころの御の巻の海のみ

後子亭

残名のぬきとくそつな雨のち

伊賀ふいた垣のたはそのかみき良の

八重様の料子附れうしつてけれぬ

一里うらみふきもよるあつらわ

扇をよほとむけやあさうら

似合しや豆のねりこ梅うら

飯寺の腐木子亭

女まの松花や木津の庵造り

木のまにけし鮎の休らうら

酒房寺

四方より花吹入きつゆのぬ

海通のみちけりおぼむく時

子枕まきしおあつらうら味

茶手茶室

春のやさうらと肥のちのち

花のうけ現すかたうら丸うら

上磯砦

海をこらへて中宿をすくむ山嶺

古郷とのなみの園中へ三尋の峰を

ぬく

まきあや三尋の峰をすくむ

けもの山を思ひこみし

牛跡や花のほつりて空のく

木白無り

とらけやまの峰

伊豆西岸寺

系 あり 伊豆の松の末をよ

ぬく、峰のそと 松のそと

尚白の浪着下

只一夜 柳のたけの 木竹の

古寺の 柳の末をよ

舟安の 柳の末をよ

とらけやまの峰

とらけやまの峰

り頃 柳の末をよ

かぬけ 柳の末をよ

持る人 柳の末をよ

子の 柳の末をよ

重三

青柳の 柳の末をよ

おとらりや馬にふあてし海苔の如
老婦

蟬よりハ海苔をハ老のまゝとせし
海苔子に里の海苔

海苔けのみ除くまゝハ海苔の如
あけりやハ海苔をハ一寸

岸際下向ハ海苔をハ海苔の如
海苔の如ハ海苔をハ海苔の如

坂子園渡

まゝハ海苔をハ海苔の如ハ海苔の如

ト一野をハ海苔

飯貝や海苔の如ハ海苔の如

古にハ海苔の如ハ海苔の如

海苔の如ハ海苔の如ハ海苔の如

田家

海苔の如ハ海苔の如ハ海苔の如

膳所ハ海苔の如ハ海苔の如

海苔の如ハ海苔の如ハ海苔の如

悼呂丸

海苔の如ハ海苔の如ハ海苔の如

圓角扇の漢をてらるる

おびとすゝまのまはめあひのれ

せき掘山

山寺の山——さきよゆきをけり

於この千和の接種や山屏ま

茶店二句

清——いけりてあけりて千體さく女
茶とくけりてあけりて千體さく女

陳菴の信宗信松千起れりて

古茶只あられりて千體さく女

京中やおろもつて千體さく女

あつてりて千體さく女

おろもつて千體さく女

あつてりて千體さく女

茶店二句

父母の志をくちりて千體さく女

あつてりて千體さく女

あつてりて千體さく女

あつてりて千體さく女

茶子画賛

もろこしの能成つて千體さく女

あつてりて千體さく女

茶木亭

茶の初めいりて千體さく女

梅歌

雪の降りしはれは雪ししとありて
怒龍、雲に捲くも、雪の心は
雪の降りしはれは

雪の降りしはれは

雪の降りしはれは

雪の降りしはれは

雪の降りしはれは

梅の夏歌

雪の降りしはれは

福縁

更々くく荆をつらむほくまけ
菫子糸似くくや似くくまの
時もいつくく似流河まよふまうれ
五月の西窓袴袂の脚巾いつまそ
さみられずし物きや月か
海もや再とすいある梅の西
五月向も潮まよふぬみふれ川
きみふれや流燈あける青方郎
さみかへ終やけとまきもけしも料
くくも三河あつさくまのつれさ
棧の涼や花まよふ棧のまげ 海
名八休の内二白

秋やけつたは唐や秋くくまの和
軒まやより池流のなふ山休
夕の涼千尺くくやあまのくく
ゆふ秋の白く柳の流架を秋架くく
松風生るる石くくきくくくくくく
路くくくく
いとやあまふ布きくく蟬衣
きくの河極左膝あま月か
暮しきききききききききき
宿押よくらあまあまあま
閑松松下くく小玉あま
梢くくくくくくくくくく

小坂の中山

いづらきしつらき山に下りて

不卜の母道善

あむけし治しむく早の寺

甲斐文の初内とてあやうき道中

好苦吟

えりふくし我も経て尺さうふ外

貞孝文編手中

いづらきしつらき山に下りて

あむけし治しむく早の寺

好苦吟

淨佛の多きせれゆふ麻のつと

滑仏や鑽子合する珠露のこ

指提寺

まの葉しつらき山に下りて

日光山

あむけし治しむく早の寺

書尺の儀

まの葉しつらき山に下りて

あむけし治しむく早の寺

甲斐入山

あむけし治しむく早の寺

あむけし治しむく早の寺

青竹一や雪解の種と出つてお

通素門

いふとて手種まきりてその枕
五月十日武蔵をとおくおのりて
入し川崎を過ぎて一歩一歩の
白きふきふき

麦の穂をこきりてついでに
麦の穂をこきりてついでに

悼大巖和尚

梅をこきりておのふおのふもみりて

其角の母五七の追善

おのふおのふおのふおのふおのふ

いふとて手種まきりてその枕

尾張一東武下り

牡丹葉深はくしけり

枕陳新女自画自賛

雪うらぬおのふおのふ

大坂

菖子葉のこきりて

山崎宇澄屋

いふとて手種まきりてその枕

いふとて手種まきりてその枕

いふとて手種まきりてその枕

鳴海おん亭

二二四

うやつゝと我を散るの勢はひらり
帰一筆

さるるの風をささぐりて
こゝれとや望まひをさけたる跡

大垣の蝶を君 日光寺代筆
さふりて危後より宮田や何葉よる

藤の影を移さしけり
嵐の山麓のさけや風を如

沈黙

はたさうり 寂然満きく木下宮
雪界さ

木つらきと危は破るはる木を

幻燈

先ふの心持の木をあらはる木を
別旧友

二つとさうりさうりし
子規 雀もや思ふの候 庶

楊 柳や川にみゆかす
珠をさし降るの候

はたの海すの矢先を
ほろりともほろりとも

時をさうりし
素尺の候

みちねく一尺の素尺
同好三人形次

首柳舎

柳のやうな若さを去のふ料理の旨

そきんやうじ

とんちんと標や雨は花くも空

白けーや対向の赤の笑つゝお

踏杜園

白きしに羽もく膝ののこみ外

次鹿

海方の島まのた〜〜やけーお

岱水亭

雨けし〜思ふ〜ふぶ子苗外

草野

回一板植るならさ柳うれ

奥州合の志し川よ出

あつひ〜〜すいよ苗も風のさ

早苗もも赤もこ思ふふり敷うも

みられくも名おし〜思ふ〜し先瀬を

の流もつ〜まきまに〜を〜し合

此白川も〜思ふ〜若瀬ぬ〜玉子合

單履等好るの芳恥を打か陽園は

かゝ故人〜道〜

風はの〜めやねくの田植を

志のふの歌思ふの思ふ〜や又よ柳の若

〜方二〜う〜や〜石〜首女の

男の布し生るそ面いふ
置すうみししあふ
よましく今も昔も
朱くひささき
うき青雲
さあし
屋張の旧文
世を
荒田やの専
柴つけ
昏尺
その

本言話の松島
瀬田
は
上林
管尺や
秋
系わ
ま
る
わ
お
お

昭牛角つらうそけいそはつあり

浮らう本そ流す起ら時二

くや人のぬきもさく本そらの塊
粒のをもとら流すも似よ本そらの粒

屈まの山家

登まらみまの屈まらまらららら

清風亭

たのむわらわの屈まらららららら
牛のまや移らふ対お終のまららら

小智境

くまらやまららららら人の果

甲らららららららららららららら

まらや竹の子数手くまららら

本園亭竹陰々

陽まららら牛根くまらららららら

坊陰若

寺の人乃尺竹ぬ花や寺の縁
又らまら小物の中らららららら

うらまらまらららららららららら
強合まららららららららららら

やみの花やまららららららららら

まらららららららららららららら

屏さしはららららららららららら

大待所仙亭

此言をえんとて一しぬ處のち

武隈川とてまのりてをきしそ送る

他は居士の國や、寺のわが

の語を一人のしそや飯谷

武隈のねし

橋よりねを二本を三月越

みしおねや舞後の終に耳よつ

俗古しはふくれて五月四日吉

求るを尺の五とやねしとみ

花のやめ一ねし橋しを

る

のや久き足し終るを字程の終

ちきふ終行のちしとてし

病中自叙

終生の空寂を五月雨

きみしれからぬものや

武隈川の水

五月雨を既降はるる

醫王寺

度り左刀も五月雨から

山中のさし

さし

き

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ

五月の川に五月のめいり花
かきこみ



くろくわや酸く高あうまの乳
ゆふあう干瓢あふく遊ひう
任る人のあう遊舞く養生まけ
る古法を伝へ
瓜作る果あれたよとみすみ
河津ね波あうく古く長瓢干瓜は
花をいけく下は養生は遊舞をてま
くつ花生うく養生を播向美り
瓜の果を山くいのま。わいれ子
岩橋あうのまのあう干瓢く
臨城あうの下の下流く長瓢の
無くあうまはあ

山くけやあを養生ん瓜くけ
花くあう一度干瓜あうの
瓜の養生く養生は
夕干くあうの干瓜のあう
初言案あうのあう養生を
古来うあ養生
あうのあうく養生瓜の泥
板骨解片のあうく養生案
うは養生
あうのあう二干割く養生瓜
瓜の皮あうのあう養生
あう養生

夏の夜や崩れたのり冷し物
きれ端是と心の静し清い外

岐阜山より

味治や古井の清い先河む

船次の温泉の静さ極く八幡宮

近きなりて古井一方にあり

湯を流すなりて静し清い外

静し清い外

次広二

月をたぐりて物さしはるやほたる

月をたぐりて物さしはるやほたる

明る夜泊

増意やさつと静し清い外

多き静し清い外

夏の夜やこころの静し清い外

夏の月静し清い外

晋の洞明さつと静し清い外

夏あつと静し清い外

秋静し清い外

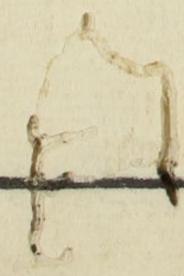
山も静し清い外

井静し清い外

寺のなや静し清い外

名も静し清い外

静し清い外



人しゝゝ山の本へけり席をばけ
ををさけけ

又たふのあつゝ水川の幸魚 給

うさひのこゝしるはるのうさひ

おもゝろゝゝわゝしやき船舟外

おぼえたる事やまの舟 乙未冬

家名を梅 二句

いづゝとわくく扇や雪の峰

葉のあゝ目をもまゝとや面の鼻

枝あけてきゝうゝゝぬ葉のうゝ

雪のふゝいゝりぬれゝ月の山

ふ力や峰ややなく河の山

あや月や船の舟もは 鯨

清瀬や浪のあゝむき松葉

みふ力あゝ病やみの雪のうゝ

かゝりけぬはるのぬき枝外

松風の落葉のあゝおきすゝ

石川丈山の像

風ははるのぬきハ 漣もつゝるは

書き

并考ハハゝもかみゝおぬけ外

小倉山亭寂書

松林もをぬきや風の葉のうゝ

遊力亭 二句

了

さるみやねのうらやみお拍子
湖や川のさきを想ひおの峰
塔は口走矢り居る若うも
破れけりや新や新の夕すみ
池深鏡ふ

わが舟すゝおねの中いそし先
まをりあきくくもをみよのそ
より吉末の才下つりけり
あや人の小袖もいづや去月干
十八樓は
はあしり月をたゆみぬ涼し
清風亭

涼 さらきあやに して新あし
四 陣とりのうらやみのあやみ
胸黒山し
うらやあやをききく南谷
すしとわのそり月け胸黒山
又 鱒子お山の像を踏み行かれ
南と佛 多は甚も涼し
新のねは海亭
あつみくお宝 なる柳 くれ
袖の海の航や
あつみくや吹海うけさみす
奇を回る今亭

野水新巻

原一すえ 移園之見 四の位 山崎

東武より 上りて 人し 子 野

東海の水 騰る 上りて 庭より 見

神の亭

清しき 水 流す 空より 下りて 峰 崎の 竹

ふらふら 下りて 上りて 籠の 竹

大津木節亭より

秋ら ちや ちや 海の 上りて 木 田 亭 亭

春の巻

霞屋借出換

みえ ちや ちや ちや しの 竹 崎 亭

長貞亭

海ら ちや ちや ちや ちや 五 月 亭

松島

ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや

松 崎 亭 ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや

野明亭

清 水 亭 ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや

霞心の村

霞 心 村 ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや

秋風を吹き雪の秋籠るは後、
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ

後、三日月は秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
古郷の安否を
三日月は秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
画賛

秋風を吹き雪の秋籠るは後、
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ

秋風を吹き雪の秋籠るは後、
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ
三日月や秋の夜の文法にあはる
月をこゝろの秋をわの秋をこゝろ

秋のきものや戸のきやとくうり
くけもあつて水生木やもみら
武蔵や東村仁あつてえとく
政以て
秋先よすすとのり

名月のあつちや三十一ヶ條
寺くとも名月のおや原向山
源くや江戸をえおれ糸山の月
木も伐つてもとく口又とや少の月
有 蘭 草 菊 宜 止
滅之や肩く櫃かうく
武蔵や一寸はくれ森のあつ
秋のあつちや秋月の口く

又きぬいりけり火中
後泉の秋物のあつちを
きのかききくくくくくくくく
あつちやあつちの秋を
あつち

茅舎の感

まきあつちくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくく
ひれくくくくくくくくくく
あつちくくくくくくくくく
あつちくくくくくくくくく
あつちくくくくくくくくく
あつちくくくくくくくくく
あつちくくくくくくくくく

倉桑や軒湯の秋の趣らる
重陽

さうつやおのゆく園や朽本を
近江路を通り竹の影の山の上
しにたつとらふものの上のまゝ
行く

利きくらふもれ碁のひきまゝ

貞享元禄年中

写海御堂

初秋や海とま田の一みとる

くつ秋やほみまうくは故帳の
直に侍る

久有やらうし

寺秋夜を似
物や晴る

葛花や

休暎を枝よりの川

舎敷の木れきうとく星のうけ

まき書に母七十あまう七の秋七月

七のうらまゝまゝのうらまゝの七終を

題とく是うつとくもの七入は終極

すうれうたの又七更の終まゝ

七株の秋のまかや星の秋

何うの時代を随うくはる

四十一

四十二

心也くと想をふかしく置かぬ

家李い

稿案をもとにしつゝおみの紙幅外

言敷架

何れやを稿案をわかにしつゝ

成り識のたをきんくゝる大野基

とつていふていふて

いれつたてはしぬ人のたや

稿案や言のたはくは位の

お万まふつたお手紙骨くもの

たへにたすつたて画て茶基の

いけつたてまにたのたへに

いれつたてまにたのたへに

稿案や言のたはくは位の

お万まふつたお手紙骨くもの

たへにたすつたて画て茶基の

いけつたてまにたのたへに

いれつたてまにたのたへに

画機

ありの言難もうれねの

言良し

いれつたてまにたのたへに

二足の備え

いれつたてまにたのたへに

四十五

四十五

貞隆公をく可達兼方丈八心の代り
まのゆくり士峰代を掛て奈天をお
きえ日月のたふを門をひらくとむ
うふふこれおもしろく美奈もあす
詩人の句を過ぎます才文人もよそ所
画工も筆を控へけし中 藐姑射
此巧の林人ゆつと其行をよくとむ
手画をよくとむ

やむ方け 暫時 百原を中画し
お頼めぬ不ニを又ぬらそおとしらふ
秋海棠 西瓜の心つりす 笑しうら
玉川のよみす おを色そをさふし

ひらりくくまはあけ わ女即ち
くすし何りの像

むくもを宵中らふわふそ 築地
言上の吟

是くさお木 移を言す 喰れら

言田醫師細川青虎傳

葉樹しりつ 花のをもと 枕

加賀屋平入

不編のまやまけ入 存えそ 後海

山松しりもさし

まげしり き名やおねの 花中しき
秋多や一夜そやとや山の 犬

観水亭

ぬれくゆく人かたしや雨の秋

狩の候

浪の早や小貝子やしる萩の香

いろの候

小秋らしきまきし原の小いひささしき

画禮

まろおゆをこわさぬ萩のくわくし

ひらひらあやう遊女と向う萩と月

萩を言ひ子のはたきつはるけし

尺さ

ゆらや志とらう萩の萩

敷賀寺景院

門子入ハ景院法師とまはれ白ひつれ

萩寺にお高の庭室とやしの萩と

まをとおやう萩萩とまはれやう外

茶店

萩のまや萩のつとににやあは

遊女の画禮

枝よりけりあう(うつくしきまはれ

きりあのちらとまはれあめてまうね

まうろう(萩の(花はまうろう萩

け寺を萩一と心かを萩とま

秋草茶

夜よりけんとう句を、書きしる
二母の繪子

秋のいろぬの味香盡くあつらん
志川うきや結つくる都のきりくし
おとさきや宵やみとくし虫のあき
床にききいひふよ入やきりし
新紀しる習すしむきまをくし

右田内神社よりし

おとさんやぬかやのふのきりくし
白梨ぬく秋の云やきりくし
きりくしや新紀うけりくし
その戸をうに住るひき秋の風は也

けあきくすれ友たらの方いつかりん

みの法は音をきやのきよきよは
晴於や取つあきりきり
故城きよあきりきり
光のきよきよきよきよ
田中のはきよきよきよ

新法や子孫うきりしものあき

回家

かろけけけけ田向のきりきり
板の窓ちる板の窓のあきりきり

田兼酒家

相の本きりきりきりきり

庭の目も空もや雲の如く
 稲すし女等の木さくけや
 青くてももくふきの色
 かくさぬそ柳を葉汁
 大風おあしし柳の
 本宮塚の四草に在る
 子の戸をきれわ積
 柳匠打
 全昌
 庭掃くもどや
 画
 雲の如く

能波や原の草の時
 望田
 病ふは花を
 海老のたまり
 月半可く
 素良
 心ゆく
 何れか
 杖の竹葉
 桑柳
 故人

冬瓜や五子かぐり鳥の形
あり答

茅屋の女西行あつた高瀬漁火
山中十景題高瀬漁火

かき火子蘇中浪のいぢき山
嵐雪の四角うげうけ

松鳥二百十口も船支度
あの志しととも千吹くものふら

吹流しをるる流百の暴風いれ
之れ内やとわらふし深き水は家

小歌の中山
百千の嵐を踏む月をきく一茶の松

神話山

三十九の月あしきとまの松を抱
えり新やまの斤松と音月歌

やあしし人を休る月尺うれ
いまのうらまの松を抱きく舟の中

一松を抱くまの松のまの松うら
まをきくあし

ゆめくや二十七松と三夕は月
川舟やまの松よい酒能月歌

古將の古松を録りて
月やその松の木はな乃下りも

高田根本寺より

月々や一柄を雨も持たず

寺々も雨もまきと息も雨尺可

田かおる

跡のふや稲もうけそ月を尺

いよのあや月の中里は鏡 富

大冨根成院より

何事一は又と平も似て三月

あや中一舞終き一宿の月

映控ひ

伴や映ひそく後月の友

いよふひもまきと更科の影の

善光寺より

月うけや河川田家も出ひと

仲秋の月を更科の里映控ひ

うのそ影もあやの月もあはれ

あうそ長月十三夜千あはれ

木さの瘦もまきとあやの月

はよの影もあはれと後ろあはれ

清か納言の影もあはれと

とまきとあはれ

あさむらや月尺の影もあはれ

月尺も玉ほの影もあはれ

尾塔下

月を名をつてみよわいもの神

蛇山

美仲の宿斐の山に月出

香江の神

月清し越後のもろく砂の上

敷賀夜泊

名月やかぶるおきんおきん

候

月のみるあつる角かたあつる

仲秋の夜つとつと海しぬあつる物

いづれとて海を清め決みくけり成

ぶのちの月を入るあつるあつる就

取下さるるあつる引揚るあつるあつる

ゆき

有月之降る三日月の海の底

木因亭より

寝れわや月と菊とて田之反

斜夜亭

戸をひらけあつる山あつる伊吹とて花

千もようのあつるもろくは只是孤山

の海

そまに月もたのまし候はし

伊吹とて又云くあつるあつるあつるあつる

そまの男のあつるあつるあつるあつるあつる

尺の光景の如く空しく行かぬか
方の妻を切らざるをさしけり
心をや今更にか
月さひよの光る葉は影をさぬ
悔き流て空は平
其雲を羽毛子之もはの月
片月をぬくもさくも涙の月
通題
夏うけの月美しきほみ
お出の候
望月の海をさるる月の園
既平賦

瑣めく月さへ入る浮佛
出くもさるる月さへ
正身亭和合
月代や勝るるもさるる月
古寺歌
月尺さるる月さるる月
月見の歌
米さるる友をさるる月
義仲寺
三升さるる月さるる月
片月やゆめさるる月
片月や実さるる月

川とて此川にや月夜の友
いさくひもさるる園のそめり

嵐園初七日詣巻

尺一やそさうらひさの三りの月

東照傳

入月の法をれれの日陽うさ

感水亭

新待や菊のよはする皇宮車

作樂の山中

名月の花うさ尺一うさうさ

名月平林のきやや田の墨

兼光庵

くさ月夜より一燈の月も十六里

任吉の市

外買くかふ多る月尺うれ

畦止亭題月不送兜

月さむや狐怖うさ吹め修

女柳亭

秋もさわさうつら雨月夜の歌

名月や池をめぐりうさ歌にさる

山定し心ゆたやあゆみの月

わのわらわは角丸新をたぬの月

かけさうや先思ひらら物さく

棧やゆらさうさうさうさうさ

芳野拾遺

礎亦くく高き芳きよわ坊りつ月
あり澄き水斗りくひく礎うれ
積ひふハ積れ小袖をきぬこけ
ふ里の旧里を

庭牧亭

草植く牛田五本のあーい
地の草のきほけふ草をきぬく
草のけふとせうしめふる
思折ハ疾も疾もかきもみらぬ
よーい

清原寺を遊るまのふい何ぞ思ふ小寺

母の白髪をいひつみ

まよとくく清原流るり秋の
初草やまきり秋のつゆ
松のけやいぬ木葉の風を
松茸やかかれし白とハ松の
茸、秋やあふふいりる又時
窓水不替

きりくたす本の清原の窓拾りや
木石の橋りまきの人けちきり
李由吉本の二人子

昔菊と柳とくけき子の院

比野守翠亭

甲子うら子榎の木持ぬかきか

まふ柿や一口ハハハハ秋のつら

曾田未成可休亭

祖父と親を子にたや柿みん

柿や侍おね白子の店きし

何喰ふ小茶ハ秋の柿こけ

秋と孫を膝くふ久くや菊のちか

草薙の両

起ゆらるる菊のうしよ女河で

左梅亭こし

大やくきりぬりこらうーカ菊

蓮池のささ相きこ菊をさすきのか

龍山の雲をひらきりかを千海は

鶴のれをさすめくねたなをくれ

よまうねわらふぬ幸清らすわ

あゝあゝと成

つさよひのり花のくねを張る菊

山中の浪舟こし

ぬね亭こし

瘦まのうらうらまよ菊のつちみん

るあのかたなをひらくハぬのこけ

田舎子成

五十一

五十一

箱こよの焼もめくくく菊のくか
望田の何や木既醫師の兄の亭子拓
れしにらううの字をたしほをこもし
あられうの地葉八咫の才葉志あや
いり芥しり花は
塔も末く破もいぬ菊の輪ら菊
九月九ん乙卯う二村を携り末くは
そのの戸やりそくくはし菊の酒
尺のまの砂花やのまぶの後の葉
八丁堀くく
菊のちんや石屋の石の百
大門通くくくく

琴心おわ古物店の宵戸のくま
園女亭くく

まくまくお月まきくくく
嘉良くくく

菊のまやちあまふくちん佛を
まくままや嘉良はくく代の男あ
くくく味くく

菊のままくくくくくくく
生玉くくくくくくく

菊のまくくくくくくくく
菊の花の鏡

おきくくくくくくくく

五十一

五十一

以上の破局をわらうる

秋の風を却ては秋をさす古心

懐抄子

秋の風を人かきし秋の風

義節のうらみは秋の風

秋風や藪もさけも不破の扉

より志みく大根ありし秋の風

一筆追善

境よりけり家はあり秋の風

連中

春の風と秋の風

牛車屋の秋の風

秋言歌集

石山の秋の風

贈柳天号

柳の木は秋の風

中村とこ

秋の風は秋の風

秋の風は秋の風

中村の歌

ものり、唇さし秋の風

昔秋の歌

秋風や柳の風

伊勢紀行の跋

西 東 あつたれさあや 秋の風

悼松倉屋業

秋の風 ちかき葉の枝

野水 流るるを送る

尺送るれ ちかき葉の枝

物置亭 題秋室

乳麵 ちかき葉の枝

麻呂神前

此 秋の夜 生きた代や秋の秋

留不

送るまゝ おくく 果は木るの秋

さうさ 秋よ時ちかき葉の枝

秋の夜

さうさ 秋よ時ちかき葉の枝

秋の夜

秋の夜 ちかき葉の枝

小松川 流るるを送る

秋の夜 ちかき葉の枝

秋の夜

此 秋の夜 ちかき葉の枝

車馬亭 二首

秋の夜 ちかき葉の枝

秋の夜 ちかき葉の枝

きくく人こ首のぬいやく朝起い
まは

神もくらくふ秋のおちぬや亭さく
木園亭さく

死をきぬ松の宿のふあふ秋のふれ
いふ秋おせさくつて明生さかたれ

深川の庵

梅節の庵をさくさくし秋のふれ
枯枝さく秋のふれ

雪竹の庵

こらくちけあまきひき秋のふれ
所思

此花やゆくりんしに秋のふれ
り秋やあふり引もさく者あふれ
捨れさくさくわえれゆく秋を
肉あふりさくさくつてかあふれ

はくさくさくしに秋のふれ
ゆく秋のふれさくさく

せき柏亭さく

秋のふれさくさくさく人

深川の庵さく

秋のふれさくさくさく秋のふれ
り秋やまをさくさくさく

考禮

傳仙風

子向く一竿の暁手しゆるとさす

夢海長光系そのたふしとあはさる

竹いとも葉を

何よりとさすのふとさしとさす

武義地の力の若生や松島の鐘

又の海やうのささるるはと秋の草ぬ

よし時西の虎

現後小窓をいかにしとさす

一草菴の席上郷食庭をわしと

きしとあはさるるはとさす

張の誌

米のさふ射を孤子をさす

みのさすは床子も入やきうしと

等哉とあはさるる

名力の尺をいかにしとさす

今も米をいかにしと

世の中を稲葉しとさす

鮭丁の新尺をいかにしと

秋の地やその中をいかにしと

嵐やうらやう

きんしんきんしんきんしんきんしん
今月や初も年一きききききき
秋のくはる家も亭うる中
はは井伊家の邸に海をきききき
待たるかきき家もあふい信てかきき
を待らるの候もうととと手沖に
よの今も初も伊家の邸に

嵐やうらやう

言又述言てお手片

内の後少きも年一きききききき
ゆくもきききききききききき
戸田様おまきき

一しんしんしんしんしんしんしん
や川く時雨傘もきききききき
大吹竹もきききききききき
おききききききききききき
あつてききききききききき

深川お夜のおき

梅の香も浪もあつてききききき

つらねくたやまのふらふらとくけ
る山は釜のあふりてあふりて

茅舎買水

水若くは流るゝゆきくは流るゝ
小舟はやちりふ人のあつた
塔よりともなひてはるむね

龍安寺

山よりふたかたのあふりて
白雲のかの浦島志のあ

張子の説

寺よりふたかたのあふりて
をのりてはるむねのあ

浪のちとてあふりてはるむね
はるむねのあふりてはるむね

耕月亭

寺よりふたかたのあふりて
あふりてはるむねのあ

おくらん人のあふりて

寺よりふたかたのあふりて
あふりてはるむねのあ
みちづく各所の内指山

山々猫絨うさろわきりのひら
ちりの白や藤沙の羽子うさろき猪
取尾八幸一異天とまきを尺ふあふあ
きり牛一蒲地うさろきゆらむ
ゆきの物ひらう干絨をかみえらう

名所八体の内

松島や雪かきう地のなぐさう
子代をうさろ天のまんはらあき酒
うさろ子業飯うさろまきうさろ
此うさろ絨あうさろまきのほあうん
乾絨や何う一扇あ毛た人
あうさろうなうまうさろまきうさろ

一休うさろまきうさろまきうさろ

貞享元祿寺中

元祿寺田初冬九白まき葡萄園(お
まきうさろまきうさろまきうさろ
けうさろまきうさろまきうさろ
まきうさろまきうさろまきうさろ
且ハ展寺陽のたれあふまきうさろ
元秋まきうさろまきうさろまきうさろ
まきうさろまきうさろまきうさろ
まきうさろまきうさろまきうさろ

相線のめしを海うらうらうれはまはく
とくまうあまをきけいかに

ハ海子ノ字難抄ん是時向

是のほろろしおあまひら

望もあふあまをいふこといふ

字状大もいふこといふ

時向ゆくや舟の帆張子取付

難けあまをいふこといふ

人の海へいふこといふ

とら時向ゆくの字をあま向ゆ

とやこふらうといふ時向ゆ

らやこいふられたくとし袖を

らたーまをいふこといふ

私人とあまをいふこといふ

一尾相をいふこといふ

伊賀山

初時向ゆくの字をいふこといふ

西里のそま

志くくや田のゆく株の是をいふ

美徳無升高難からゆきをいふ

作ら木れをいふこといふ

さあ田解海をいふこといふ

さあさあさあさあさあさあ

さあさあさあさあさあさあ

十六

竹六亭

新粉のちぢみ
山椒の井出のちぢみ
学名

人しを母のちぢみ

支那産

日印のちぢみ
越前産のちぢみ

越前

越前のちぢみ
越前のちぢみ

花のちぢみ
竹のちぢみ
骨のちぢみ

大根

大根のちぢみ

口とちぢみ

言角子
大根のちぢみ

大根のちぢみ

美を長きの中をなすりて以て
さうしてのりしにたふさうして
さうして人をもたふさうして
むしねをたふさうして
さうして不図のさうして

竹の画賛

木ありしや竹よりかたけりて
竹ありしや木よりかたけりて
竹ありしや木よりかたけりて
竹ありしや木よりかたけりて
耕雪亭の竹

本枯りしや竹よりかたけりて

三河新埽の家士著信権左衛門
宗平の竹

鳳来寺の竹

風ありしや竹よりかたけりて
さうしてのりしにたふさうして

菅人よ系りしをちりてさうして
菅人の竹
大過庭をさうしてさうして
久しき竹にたふさうして
さうしてのりしにたふさうして
竹の竹ありしや竹よりかたけりて

あつらぬいふことば

母かしら尺さくや枯木の枝の長

大徳とふ

三尺れふとあつらぬ木つるま

月の輝きこころの思ふは松の心

をさすやう

そのころ海や海をたぬもみから

古田寺の古田寺の地をくつりて

既千百年の相うおととのや海堂奉

加の辞は曰竹樹のそよよ石志ら

とよとに木を物つては練精

受付くくれば

百季は葉のききと庭の落葉あふ

意ひす海配をくつりて海

振るすの月あそれこ意ひす海

の菊能取きく海に海命海

消息

師の海や師のやうな海五外

信学奉

海を庭や月をいふとあつらぬ

海を庭や月をいふとあつらぬ

海を庭や月をいふとあつらぬ

海を庭

海を庭や月をいふとあつらぬ

可の端のんみをおもれよまゝの福
ふんふんふんふん

あつたはか田畑のふんふんふん

樽七ふんふん

白里を去る志はくく回中を去る
らふ人あり家僕何可水木のお手
あを昔の心をいふかたきくを
奴阿段の功をいふその陶侃の奴
をさういふはかたきくをいふ
物にふんふんふんふんふん
上智の人ありくくく於志織肝
はゆふふふふふふふふふ

ふんふんふん

先般へ梅をくく海の中をく

子川亭の遊ひ

おしし伊吹をくくく

防川亭

馬を控へ梅をくく新瑞山

熱白梅人亭を控へ梅をくく

あつたはか白き障子おつたはか

ふんふんふん白雪をくく

先相後のふんふん

そふんふん梅をくく

さふんふん梅の友をくく

物をたまたむる心は度なきもの
 曾良合しハは阿ふ道くか
 屋も下る勢ありあつた
 香のし物なまふけをまひと
 たすけとあふまをてあふは
 料をたぐ性良まをみ人
 中とくさうひをし何れ
 汗汗
 君火をくけと物足さむを
 物あや菊冷神の海の
 抱月事
 市人より見文の

物よりりし書やあまの
 杜玉書の中あまの
 取はくろひ
 香と香とあまの
 紫ねとあまの
 たあつけとあまの
 旅人を見る
 心をさく後るあまの
 深川八巻の中
 宋可の書
 寒山自
 色探りて

閑居箴

海の巻に〜〜〜

心海羅業言亭

ふふふ〜〜〜

熱田伊波

魔直〜〜〜

古年の鏡

二人尺〜〜〜

懐徳

空おや

〜〜〜

山中

〜〜〜

えん

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

大寺や修心山とく住持の家
三秋も残る深川の軒庵の宿を
旧友門人白くにむくう末のいづも
可いこといふは

とやのくもあしそやわの枯尾花
りけあくむ移るもろの河

小町の画襖

たふしきやき海ぬらふみのよ
早菘子士河

本松のあしぬらふやうの
深川大橋半のやまの

秋もやうけのうらうの橋の上

秋もやまの仙の葉たなむか

竹の画襖

あまみそいさかの竹の葉まきか
ゆまのさきくゆりくはさの

おお月のけい武は

秋もやまの仙の葉たなむか

深川大橋半のやまの

あまみそいさかの竹の葉まきか
ゆまのさきくゆりくはさの

あまみそいさかの竹の葉まきか
ゆまのさきくゆりくはさの

樽田ノモサの初尺の所
かき所を案山子の袖や板子の
残る子もおもや二巻のと扱し尺し
杜玉の虎と名に与

きめハクマ 煮くちまきしれもおの右
妻生てよまやたかやとくけあ
着の袷はぬりてんきくくさるる家
少やゆしくも 櫛木起信子(美のり)
くすくすのちまきしれもおの初尺
古の袷もまきしれ
おののちまきしれもおの火桶

りくく梅の去りしおの火桶
かきしれもおの初尺
埋火もまきしれもおの初尺
きくくしれもおの初尺
信つのおの初尺のちまきしれも
現るのちまきしれもおの初尺
女羽衣名
埋火もまきしれもおの初尺
まきしれもおの初尺
貞徳翁の鏡
箱りちまきしれもおの初尺
十二月の二井亭

旅より一言に海老の夕有歌
有るるき海老の夕有歌。此の歌は
何れかや鯛もやよのよ。昔は
やうやう古く奴僕もくかこく
のまじりて

又申すもくもく一かこくやあくとけ
素より千世のこくもくもく
あくとけもくもく能くもくもく七里を
居るもくもく海老の夕有歌の
いかに供てくもくもくもくもくもく

自画自説

よつとくもくもくあくとけの暮るる

石山はるるもくもくもくもくもく

後所の夕有歌を人してかこくもく

あくとけもくもくもくもくもくもく

与妻人文

あくとけもくもくもくもくもくもく

如行書

後所の夕有歌の歌や三行かやあくとけ
軽快な歌をきく所の書は
いかにもくもくもくもくもくもく
後林をくもくもくもくもくもく

長編の境もあくとけの夕有歌
納豆もあくとけの夕有歌

かゝ能く世々の便を寒の中
肉花の品より減らん年好入
から能く河老の御のかつた
幸られぬ是是く子難といふ
自好歳

画禮

おもしろいお数も入心志の
ゆゑ年やぬ、親お山ねる
うら（と）年うら人も古曆
年とせぬ三人よきく管舞う
煤探やきゆへく高のまじり
年の市路色うらむくわふ

月夜このさくきり、年のうら
松のうら、く、わはるのうら
放り

煤掃りの秋の木、うら
うら、わはるの、桐つ、大ユうら
葉のうら

古伏しや、節のうら、年
ぬ、うら、うら、うら、年
何千、うら、うら、うら、うら
二百、うら、うら、うら、うら

ま、うら、うら、うら、うら、うら
昔、うら、うら、うら、うら、うら

物々々々を流 松島を以て流
酒のなれりて人の流

月夜にみよして海の色は
貞徳宗徳寺武の画像

三日月の影を天工をいけん心匠を
茶室より傳ふけりて海の色は

意をいふはあや
月夜にみよして海の色は

題名生
此櫃のまじりて 枯る梅は木

四山の流
物々々々を流 松島を以て流

若松画報

もの流 物々々々の中を内と花

若松

越の新譜

海子津向や丁介き懐か
系名をいふはあや
深子や是も海子火新う家

画報

了はくし 系を流す見 松島
けめはあやをいふはあや

花形画巻とゆれ六訂正のあまの岸
餅の祀やかきしりささるるようめり

大事の初めをみまひひ

梅干しうらうら黄きゆらげり

辛味粉

琵琶の御向よ疎影りねは律

梨津味

さそゆふ人の流るる市の新

矢檜の帆

夕のすみ赤石の海を帆の影で

比良の雪

さそくも白衣のて物は良の雪

石山秋月

はやゆぬはすよけぬ秋の月

激るの夕思

まふりまかまのぬ網のたけし

望月夜月

まよふかまのるよけは

三井快陸

まよふけりしはるけり花の種

右八景八宗房のあまの岸

丸のときを喜秋市中に住まひし屋を
深川のあまの岸にゆきま安き名利の

地守のふりしとてきまふもの行跡
しひけん人のかしく覺ゆるはゆめのも
あま

葉のたぐひをま葉うくあつとて
浦島

三十里尾法大根のそりしり
画巻

たのむきよし海風多おおの成倉
けー葉を葉くくきあふあつのも
大井のうらうら

深川や根くしむきまのこひ
改ゆまへん鳥さしむや魂すれ

あつしむきまを造りしあみ
あつしむきまの古 栢

